№37 2023.10

放射線リスクコミュニケーション

相談員支援センターだより

複数市町村意見交換会の例

放射線教育に関する合同意見交換会

放射線リスコミセンターでは、昨年度より教員や指導主事等を対象とした複数市町村意見交換会を開催しています。今年度は令和 5 年 7 月 13 日に楢葉町地域学校協働センターにて、広野町、楢葉町、富岡町、川内村の小中学校教員及び指導主事、社会教育主事を対象として放射線教育に関する情報共有や意見交換を行いました。

【放射線教育の実施内容について】

はじめに情報共有として、これまでの放射線教育の実施状況と今年度の実施内容について、学校ごとに発表を行いました。

人権教育と絡めた学習や学活、理科、保健体育等を通して、教科横断的に放射線への理解を深める学習、学校にあるモニタリングポストを活用しての学習、委員会活動等、様々な観点から放射線教育が行われていることの事例紹介がありました。

【意見交換について】

情報共有をふまえ、福島市立松陵中学校長の阿部洋己先生をファシリテーターとし、意見交換を行いました。

「教科横断型での学習や日常生活において放射線教育に繋がる部分で大事にしていることは何か」との問いかけには、「社会科で四大公害病が出てきた際には、放射線が大気汚染と通ずる部分があるため、福島第一原子力発電所事故の話もしている」等の意見がありました。また、「震災から時間が経過するにつれて、子どもたちにとって過去の出来事となり、自分たちの課題として捉えられていない」との声には、「震災の事実を知った上で、町の復興に自分たちがどう関わっていけるのかを考えるために、子どもたち自らテーマを掲げ活動している」等の意見がありました。

最後に、ファシリテーターの阿部先生より、「今までの積み重ねがあり、学校独自の工夫がある放射線教育を行っていることが共有できた。福島県内に住んでいる子どもたちは、他県の子どもたちより放射線について意識をする機会があると思うが、これから時間が経ち間違いなく事故の記憶等が薄れていく。子どもたちが『なぜ放射線について学ばなければいけないのか』、『教訓をどう生かすのか』を学ぶ必要性を感じてもらうことが大事である」と総括がありました。

オンライン参加者も含めた意見交換の様子

【振り返りまとめ】

意見交換後に、各町村の指導主事による振り返りを行いました。

「放射線に関する知識を学ぶ必要性を保護者や子どもたちに落とし込むにはどのようにしたら良いか」との問いかけに、「放射線教育の基軸だけでなく、4町村が押さえなければならない方針を指導主事から教員に示してあげられると良い」、「食育で身の回りの物を調べるといったことから放射線教育に繋げられると良いのではないか」との意見がありました。さらに、「学校の負担を考慮

すると、放射線教育は教科の中で行うのか、日常学習で行うのか、総合的な学習の時間に行うのか。最終的な成果物をアウトプットするときに、どのようなイメージを持っているのか」との問いかけには、「理想は、子どもたちが課題やテーマとして捉えられることである。総合学習がカギになると思う」、「教育委員会が主体の行事の中で出来れば、保護者としても、教員としても助かり、子どもにとってもプラスになる」との意見がありました。

今後も 4 町村やその他の市町村の教育関係者を対象に放射線教育に関する研修会や意見交換会を開催する予定です。当センターでも、各学校の課題に向き合った放射線教育支援ができればと考えています。

研修会の例

双葉町　研修会

令和 5 年 7 月 26 日、双葉町役場にて、新任職員と受講を希望する職員を対象に放射線に関する研修会を開催しました。今回の研修会は、帰町や移住する方を迎え入れる準備の一環として、職員の放射線への理解を深めることを目的としています。

折田講師による講義の様子

双葉町と包括連携協定を締結している長崎大学の折田真紀子先生を講師に迎え、放射線の基礎知識や健康影響等について講義を行いました。講義では、放射性物質、放射線の違いや放射線の種類、外部被ばくと内部被ばく、放射線の健康リスク等について説明がありました。また、双葉町における事故初期の外部被ばく線量や空間線量率の推移、双葉町を散策した際の個人被ばく線量等、双葉町での生活に密着した具体的な線量が示され、それらについての解説がありました。放射線の話と絡めて、折田先生の地元である長崎県の話もあり、参加者と会話のキャッチボールをしながら、折田先生ならではの親しみやすい研修会となりました。

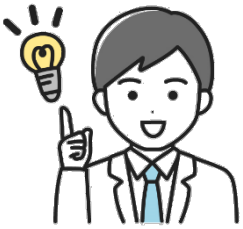
研修会開催後のアンケートには、「現在、企業が取り組んでいる海藻等の実証実験や海水浴への影響等、処理水の問題が気になる」、「説明が分かりやすかった」等の感想がありました。

研修会の例

浪江町　研修会

令和 5 年 8 月 4 日、浪江町役場にて、新任職員を対象に職員が業務や住民対応において必要とされる放射線に関する正しい知識を身につけることを目的とした研修会を開催しました。

平成 30 年度から浪江町役場の研修会で毎年講師を務める福島県立医科大学の佐藤久志先生を講師に迎え、放射線の基礎知識や健康影響等に関する講義を行いました。講義では、福島第一原子力発電所の事故による原子力災害、放射線の人体への影響等について説明がありました。また、想定される住民からの相談と各種相談に対する回答のアドバイスがありました。医師として、また、子を持つ親としての佐藤先生の放射線に対する想いや経験談もあり、放射線をより身近に感じられる講義となりました。講義後には、当センターから、放射線相談に活用できる支援ツールを紹介しました。



研修会開催後のアンケートには、「非常に勉強になった。さらに安心をして過ごすことができそうである」、「頻繁に参加をする必要はないと思うが、適度に期間を空

けて継続的に研修に参加をすることで、知識の確認や新しい情報の知見を得ることができれば良いと思う」等の声がありました。今回の研修会で得た知識を役立ててもらえると嬉しく思います。

佐藤講師による講義の様子

車座意見交換会の例

富岡町　車座意見交換会

富岡町社会福祉協議会では、地域での孤立・閉じこもり防止や健康・生きがいづくりを目的として、誰もが気軽に参加し楽しい仲間づくりや交流ができる「ふれあいサロン　ゆうゆう倶楽部」を主催しています。当センターでは、上記サロンへの参加者 11 名を対象として、令和 5 年 8 月 18 日に施設見学型の車座意見交換会を開催しました。その支援内容や当日の様子をご紹介します。

【コミュタン福島の見学について】

福島の現状や放射線・環境問題について楽しく学ぶとともに、放射線についての理解を深めるため、福島県環境創造センター交流棟「コミュタン福島」（以下、コミュタン福島）の見学を行いました。コミュタン福島には、放射線や福島の環境の現状に関する映像のほか、様々な体験型の展示があります。今回は施設担当者から各展示等の詳しい説明を聞くことができました。展示例として、霧箱（放射線の飛跡を見ることができる装置）の観察では、α（アルファ）線・β（ベータ）線・γ（ガンマ）線・宇宙線の飛跡を実際に目で見ることで、様々な種類の放射線が存在し、それらはもともと自然界にあるということを学びました。また、放射線はレントゲン検査やがん治療等の医療分野をはじめ、様々な分野で利用されており、「ただ危ない」というものではなく、放射線をどれだけ受けるかといった、「量」という尺度で考えることが大切であると学びました。

施設担当者による説明の様子

霧箱観察の様子

【意見交換について】

三春交流館「まほら」にて、コミュタン福島を見学したことで放射線へのイメージがどう変化したか、また、普段放射線について疑問に思っていることや不安に感じていること等について、参加者同士で意見交換を行いました。参加者からは、「放射線を測る機械等は何度も見たことがあるが、霧箱は初めて見た。実際に霧箱を見て、放射線はどこにでもあるということを理解できた。」という声や、「放射線量測定マップにて、福島県と日本各地との比較や世界各地との線量が表示されており、福島県

の空間線量率が特別高いわけではないことを知った。」等、改めて放射線について学ぶことで、より理解が深まり、放射線への不安も少しずつ解消されていた印象でした。他にも、身近な放射線関連の話題が上がり、終始話しやすい雰囲気の中、様々な意見が飛び交う会となりました。

参加者による意見交換の様子

情報提供

大熊町　学び舎ゆめの森

【学校教育施設　学び舎ゆめの森】

認定こども園と義務教育学校、預かり保育、学童保育が一体となった教育施設「学び舎ゆめの森」の新校舎が大熊町内大川原地区に完成しました。令和 5 年 8 月 25 日の第 2 学期始業式から新校舎としての使用が始まり、同時に子どもたちの新たな学びがスタートしました。

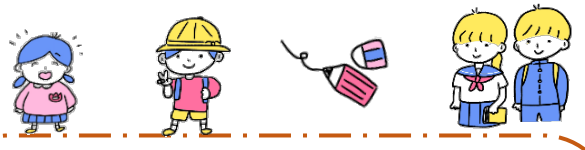
【町内での教育活動再開までの道のり】

大熊町は、東日本大震災と東京電力福島第一原発事故により全町避難を余儀なくされ、幼児・児童・生徒数が被災前の約 1 パーセントまで減少しました。その後、町の教育活動は避難先である会津若松市の仮校舎にて再開・継続されました。令和 4 年 3 月に熊町小・大野小、大熊中の 3 校が閉校となり、同年 4 月、会津若松市に義務教育学校「学び舎ゆめの森」が開校しました。そして令和 5 年 4 月、町立学び舎ゆめの森が会津若松市から町内に移転し、約 12 年ぶりに町内大川原地区での教育活動が再開されました。校舎の完成を待つ 1 学期の間、町役場や町住民福祉センターといった既存施設の一部を代替施設として利用し、子どもたちへ教育活動を行ってきました。

【大熊町から始まる新たな学びのかたち】

学び舎ゆめの森の新校舎は内外ともに特徴的かつ独創的な造りとなっており、その造りから「多様性と混在が共にある新しい教育空間」と「自由に学びがデザインできる環境」が生み出されています。また学びのスタイルも斬新で、少人数をメリットとした ICT を活用した個別最適化な学び、協働的な学び、探究的な学びを充実させることで、教科書で正解を覚えるのではなく、自分で正解を創り出す力、いわゆる”これからの社会に必要な学びのかたち”が体現されています。大熊町では、豊かな歴史・伝統・文化を守り活用しながら、自由に学ぶことができ、地域住民との関わりを通じて互いに成長することができる学びの拠点として、また大熊町の復興の中核を担う交流拠点として、0 歳から 100 歳までの学び舎となることを目指しています。

学び舎ゆめの森　HP より



放射線リスクコミュニケーション
相談員支援センターだより №37
発行：放射線リスクコミュニケーション相談員支援センター
連絡先：〒970-8026 いわき市平字小太郎町 1-6
いわきセンタービル 5 階
フリーダイヤル：0120 -478-100
FAX：0246-35-5158
E-mail：F-sodan@nsra.or.jp

本だよりは、環境省の令和 5 年度放射線健康管理・健康不安対策事業（福島県内における放射線に係る健康影響等に関するリスクコミュニケーション事業）に基づき、作成しています。